

令和3年度 学校図書館県内研修会 報告書

(記載責任者 不二聖心女子学院中学校・高等学校 司書 登坂あゆみ)

1. 研修目的

- ・21世紀型教育における、授業や教科及び教員との連携、また図書館を学びの基地とする先進事例などについて図書館関係者及び、各教科担当者との協議、研究の機会とする。
- ・オンライン教育、ハイブリット型の教育普及の中で求められる今後の学校図書館の在り方について研修・協議の場とする。
- ・読書活動の推進はもとより、今日求められている情報センターとしての役割など学校図書館の充実について広く研究・協議する。

2. 期日 令和3年11月19日(金)

3. 会場 静岡県私学会館 5階大会議室

4. 参加人数 24名(うち対面参加11名、オンライン3名、録画視聴10名)

5. 日程

(午前) 講演「これから求められる学校図書館～図書館をハブとした探究・授業への関わり、サポート、
図書館スタッフに求められる資質などについて～」

講師 平野誠氏 中央大学附属中学校・高等学校 司書教諭

(午後) ワークショップ ①ネットワーク情報資源の収集・選定・提供を体験しよう

②新聞記事データベースを利用したNIE

【中央大学附属中学校高等学校について】

1. 校訓 「明るく、強く、正しく」

2. 教育目標

中央大学の学風『質実剛健』を基盤に、知育・徳育・体育三者の調和ある教育活動を展開。高い知性と豊かな感性を持った社会で活躍できる人材育成を目標に掲げている。

3. 沿革

1909年 創立

1948年(新制) 杉並高等学校・杉並中学校となる

1952年 中央大学杉並高等学校と改称 1963年 中央大学附属高等学校と改称

*1978年 図書館棟(本館 3階建て 閲覧席 300席 3クラス同時授業可能)開館

2001年 男女共学となる 2010年 中央大学附属中学校開校 中央大学附属中学校・高等学校となる

*2010年 図書館分館(閲覧席 55席 1クラス授業可能スペース有)開館 *中学校舎にあり

4. 生徒数 中学校 516名 高等学校 1161名(2021年5月1日現在)

講師勤務校では、「自主・自治・自律」の土台を作る多彩なプログラム(体験型学習、教養総合、理数教育/SSH、グローバル教育)が展開されている。中学60冊、高等学校100冊の課題図書を読破は、伝統の一つとなっており、読書の楽しさを知り、豊かな教養を身に付け、思考力・判断力を養う読書習慣の確立は学校教育の中で育まれている。さらに、学びの集大成として、自分でテーマを設定し、文系の生徒は卒業論文を、理系の生徒は中央大学理工学部との連携の中で卒業研究を行っている。このような活動をはじめ、多いときで年間1000時間以上、6学年ほとんどの教科で授業利用される図書館は、約18万7000冊の蔵書と約5500本

の視聴覚資料を有し、知的空間として機能し、教科と教科、知識と生徒を繋ぐハブ的役割を果たしている。こうした図書館を運営されている司書教諭の平野先生から、教育活動を支える図書館の姿について実り多いお話をうかがうことができた。



【講演】

① 将来へ向けての読書

中学60冊、高等学校100冊の学校指定課題図書の読破が伝統の一つとなっている。同じ本を同じ時期に読んでいる生徒たちの間では、一冊の本を話題とした会話が日常的に生まれる。教員が生徒に本の感想を求めることはない。国語の試験を通して、課題図書となっている本の読解力を問う問題が必ず出題されることになっている。課題図書=基礎的なもの（生徒に中高生の時期に読んでほしい作品）を読みこなした上での自由読書、という考え方が学校全体にある。また、「課題図書を通じた読書により、読書の楽しさを知り、豊かな教養を身につけ、思考力・判断力を養うことは、書く力を育てることに通じる」と実践を通じ、平野先生はお話くださった。学校指定の課題図書は、「将来に向けての読書」の基盤をつくる大きな役割を担っているとと言えるだろう。

② アカデミックリテラシーを養う

中学1年生から、課題解決型学習や研究活動に学校全体で取り組んでいる。教科横断型の教育実践の中心的な場となっているのが、図書館である。課題図書を通じて、「読み解く力」を育成することと同時に、図書館を活用した授業の中で「学問的な読み書き能力」を6年かけて身につけていく。確実に身になる読書が実践されていることが研究活動にも直結されており、その集大成として行われるのが1万文字にも及ぶ卒業論文、卒業研究である。先生が運営される図書館では、学習指導の支援を念頭にした運営が行われており、図書館蔵書の中でも社会科学、自然科学分野の本の割合が多いことを特徴とされている。図書館で授業が行われることによって、授業にどんな資料が必要なのか、必要とされているのかを司書教諭、司書がサーチすることができることは、研究活動の支援がしやすくなり生徒や教員からのレファレンスにも応えやすくなる。「Google ではなく単純に図書館で調べたいと考える教員が多い」とお話をくださった平野先生の言葉が印象的であった。これは教員自身が教科への精通はもちろんのこと、どう学ぶかということに意識が向いていることの現れと言えるだろう。

③ ICTの整備をきっかけに活性化した図書館

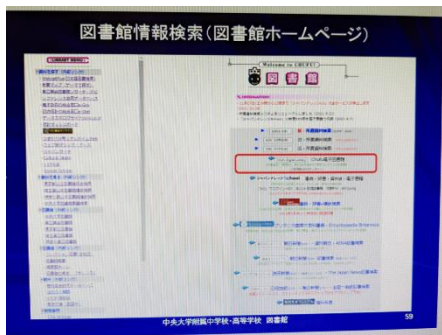
教育用 ICT（パソコン、プリンタ、スクリーン）の数を図書館内に大幅に増やしたことが、図書館で行われる授業が飛躍的に増えるきっかけとなったようだ。一人一台パソコンが使用できるようになり、蔵書の検索や Web を使用した調べものがスムーズに行えるようになったこと、OPAC の整備*により本の検索が容易になったこと、教育用コンテンツ*の導入等を充実させ、アナログとデジタルのコンテンツを使いこなす図書館の実現が、図書館をハブとした学びを加速させた。

*OPAC の整備・・・調べたいコンテンツがより多くヒットするように、利用者が調べたいキーワードを積極的に追記し書誌データを整備した。資料検索の時間が短くなることで、本を探すことに時間を費やすことから抜け出し、探し出した資料をもとに学ぶことに時間をかけることができる学習支援が可能となった。

「本校の OPAC は教材教具である」という先生のお言葉は、日々の図書館利用の中で先生が体感された整備の成果を示すものと言える。

*教育用コンテンツの導入と図書館ポータルサイト・・・信頼できるデジタルコンテンツは、辞書・事典類、新聞記

事データベースなど8種の商用データベースを契約。導入に留まることなく、生徒や教員がコンテンツを利用しやすい独自の図書館ポータルサイトが作成され、学びの質を高める学習用ツールとなっている。有償のデータベースだけではなく、比較的信頼のおける無料コンテンツのリンク集もポータルサイトに合わせて掲載することで、良質なコンテンツによる情報収集を推奨している。また、図書館ポータルサイトは生徒や教員の個人PCからも利用が可能となっている。



中央大学附属中学校・高等学校図書館ポータルサイト

https://www.hs.chuo-u.ac.jp/contents/wp-content/uploads/tosyo_kensaku.pdf

ネット上にある限りない情報は、中高生が信頼してよいかの真偽を確かめることは難しい。ネット上にある不確かな情報を、あたかも正しい事であるかのように生徒が活用してしまうという悩ましい現状が一般的にある中で、信頼のおけるデジタルコンテンツを提示することは大変有効的であると感じた。アクセスしやすい工夫をすることも大切であり、図書館に求められる「機能を追求していくこと」が図書館スタッフに求められる資質であるとも言える。このような努力を続けることが、図書館のアクセシビリティが向上していくことに結び付いていく。

これからの図書館は、紙の図書資料と併せてICTとの二本柱での運営が必要である。デジタル×アナログのハイブリット型図書館が学習センター・情報センター・読書センターとしての図書館の機能をより高めることに繋がっていく。

【ワークショップ】

① ネットワーク情報資源の収集・選定・提供を体験しよう

「web サイト紹介シート」の作成

本の選定と同じように、情報資源の収集や取捨選択をし、利用者に提供することも、図書館の役割の一つである。そして、本を本棚に並べることと同じように、選択した情報をどう示していくのかをワークショップを通して学ぶことができた。

(手順)

- ・学習教材としての活用を前提とし、その候補となるフリーのネットワークの情報源を収集する
- ・候補となるフリーのネットワーク情報源を精査する
- ・個人所有端末の利用も想定し、「web サイト紹介シート」の作成をURLとQRコード両方を提示する形で作成する

以上の方法で、1シート1web サイトで紹介シートの作成を個々に行い、全体でシェアすることができた。完成した「web サイト紹介シート」を共有できるシステムが構築できれば、レファレンスの幅がそれぞれ学内で広がるのではないかと、また学校間での「web サイト紹介シート」の共有もできるのではないかと、という可能性も見出すことができた。



② 新聞記事データベースを利用したNIE 「新聞スクラップ」の作成

新聞記事データベース(スクール for ヨミダスを活用)を利用した「新聞スクラップ」の作成について学ぶ。新聞を購読しない家庭の増加により、生徒も教員も新聞に触れる機会が減少している。しかし、新聞で主体的・批判的に様々な記事を見比べることによって情報を読み解く力を身につけることが可能であり、教科横断型の学習にも役立つ。どのようにすれば、世の中を知るためのツールとして最良と言える新聞が、生徒たちの身近なものとなるのか。新聞に親しみ、新聞を身近な情報源と生徒が感じるためのしかけを提案してくださった。

＊新聞スクラップは一般的に紙の新聞を利用するが、今回は ICT 活用の視点からデータベースを活用した
(新聞データベースの利点)

- ・デジタルは切り抜いても紙のようになくなる
- ・1人1台端末さえあれば、校内で商用新聞データベースから新聞スクラップの作成が可能
- ・同時に同じ記事を読める利点もある
- ・新聞記事検索の場合、記事検索機能から必要な記事に簡単にたどり着くことが可能

(データベースを活用した「新聞スクラップ」の方法)

- ・新聞記事にタイトルをつけ、記事の要約や記事を選んだ理由などを互いにシェアする

以上の方法で、「新聞スクラップ」を作成し全体でシェアすることができた。データベースを活用することで、作成した新聞スクラップのデータシェアも容易に行うことができる。継続した「新聞スクラップ」を可能とする、ICT を活用した学びのヒントをいただくことができたワークショップとなった。

今回の研修会では、世の中の状況の鑑み、当日対面での研修会とは別にオンライン配信を行った。また、後日視聴の参加者も募り、できる限り多くの先生方に研修会に参加していただける機会を設けた。オンライン、ハイブリット型の教育普及の中で、図書館の機能をどのように高めていくのか、研修会の在り方を含め学ぶことの多い研修となった。



後日視聴の様子